

早朝の光が熟睡する致庸の顔を照らしていた。夢の中で致庸は尚もにこにこ笑い、ぶつぶつと寢言をつぶやいていた。

「だれが喬致庸だ？ 喬致庸ってだれだ？ わたしは喬致庸じゃなくて、莊子なのか？ ちがう、わたしは莊子でもない、わたしは蝶だ、自由で気ままな蝶なんだ——」

長身でひよろりとした下男の長栓が、足音を忍ばせて致庸のそばに歩み寄った。長栓はため息をひとつつくと声を限りに二ワトリの鳴き真似をした。たたき起こされた致庸は、目をこすりながらも、まだ寝ぼけている。長栓は再びため息をつくど致庸の耳に口をつけてなにやらささやいた。致庸は「あつ」と一声、飛び起きて走り出した。あたふたと身支度を整えると部屋を突っ切って中庭に走り出る。

長栓は飛び出してきた長順と杏児に挨拶すると急いで後を追った。せいぜいと息を喘がせて母屋に駆け込んだ致庸は、いきなり致広と出くわした。致広は衣冠を整えて端座し、曹氏と張媽が両側に控えている。致庸は嬉しいやら有り難いやら、致広のむずかしい顔などおかまいなくへらへらと話しかけた。

「兄さん、起きられるようになったんですか？ 病気がよくなったんですね？」

致庸が子どもっぽく真情を露わにしたせいだろうか、致広は目頭が熱くなるのを感じ、慌てて襟を正すと怒鳴りつけた。

「跪け！」

致庸はビクリとしたが、すぐににこやかに膝をつくど尚も言い訳がましく、

「兄さん、嫂さん、聞いてくださいいよ、今日はこんなに大事な日だっていうのに、長栓のやつ、わたしを起こしてくれないんですよ、お仕置きものですよね？」

そう言いながら、長栓の方に首をひねるとじろりと睨み付けた。長栓は悔しがって地団駄を踏んだが敢えて口答えはしなかった。

致広はそれには答えず、肘掛け椅子の彫刻を施した手すりを手探りで掴んで立ち上がろうとした。しかしやはりうまくいかず、両脇にいた曹氏と張媽が急いで支えるとゆっくりと助けおこした。致広は立ち上がると、ふたりの手を払いのけ、落ち着いた声で命じた。

「爆竹を鳴らせ！ 音楽を始めろ！」

長順が門の外に手を振ると、楽隊の演奏と爆竹の音が一斉に鳴り始めた。

致庸はびつくりして訝しげに尋ねた。

「兄さん、今日は何の日ですか、どうしてこんな大騒ぎをするんです？」

致広は逆に重々しく問い返した。

「致庸、まだ今日が何の日かわからんのか？」

致庸は頭を搔くと、ちよつと考えた末に困り果てて言った。

「今日は八月十三日ですよね？」

致広は小さくうなずいた。

「おまえは十年学問をして、ついに試験を受ける門出の日を迎えたのだ。戻って来る時は拳人であり進士であるわけだ。そうなるど長いこと家を離れていなければならなくなり、あまり家

にいられなくなる。なのにおまえときたら、株立つに当たり両親やわれら喬家三門のご先祖様にお別れの挨拶をしていないではないか。両親とご先祖さまに道中の無事と速やかな成功をお願いしなさい」

みなが致庸に目を向けている。致庸はばかばかしいと思ったが、あまり野放図にふるまうわけにもいかず、しばらくしてようやく口を開いた。

「兄さん、これじゃあまりに大袈裟……いえ、致庸は本日郷試を受けて参りますが、合格できるかどうかはまだわからないですよ！ それに、挙人の試験を受けに行くからって、なにもこんなに大騒ぎしてご先祖様を煩わせなくても」

致広はきつと顔色を変えた。

「黙れ！ ここをどこだと思っている、おまえが口任せにでたらめを言っていない場所か！」

致庸は慌てて顔をひきしめた。

「はい、兄さん！」

致広が長順に手振りで合図すると、長順は恭しく三本の線香に火をつけ、致庸に手渡した。

致庸は気乗りがしなかったが、そうも言ってはおられず、目を閉じて香を供え、儀式のように跪拝して祈禱した。

「父上様母上様ご先祖様、致庸は本日兄上嫂上の命を奉り、太原府に郷試を受けに行つて参ります。本来わたくしは郷試ごときで父上様母上様ご先祖様をお騒がせするつもりはなかったのですが、しかし兄上が是非にと申しますので、仕方なく言われた通りにいたしておる次第でございます。父上様母上様ご先祖様方、どうかこの致庸をお守り下さい。兄上と嫂上のもとに、

挙人となって太原府から戻つて来られるようにしてください。できたらちゃちゃっと簡単に片づきますように！」

言い終わると深いため息をついて、にこやかに致広を振り返った。

「兄さん、これでいいですか？」

致広の目にふいに涙がこみ上げたてきた。致庸は顔色を変えて慌てて尋ねた。

「兄さん——」

致広は必死に涙をこらえると、微笑んで致庸を手招きした。

「弟よ、こちらへ来て兄に手を貸してくれ！」

致広は差し伸べられた曹氏の手を押しつけた。致庸は急いで二歩で駆け寄ると兄を支えて一歩一歩歩いた。致広は香を供えて地面に跪き祈禱した。

「天にまします父上様母上様、十六年前おふたりがこの世を去られる歳に、致庸をわたしと嫁の曹氏に託していかれましたね。十六年が過ぎました。致広と曹氏はあなた方のご命令に違わず、立派に致庸を育てあげました。これから致庸は家を離れ太原府に郷試を受けに行つて参ります。父上様母上様、弟は必ずやあなた方のご期待に添うでしょう。われら喬家三門からついに挙人が出るのです。天にましますお二人の霊よ、どうぞ致庸が郷試に合格するようお守り下さい。そして来年は殿試（科擧の最終試験。天子の前で行われる）に及第し、状元（殿試の主席合格者）に選ばれますように！ 致広はご両親およびご先祖様方に叩頭させていただきませう！」

致広は喘ぎながら唱える間も幾度も休まねばならなかった。そうしてできる空白の時間は、

あたかも鋸のようにかれの胸を切り裂き耐え難い痛みを与えた。致広は必死に頑張つてようよ
うのことでこれだけのことを言い終わると、苦勞して叩頭したが、そのまま立ち上がることが
できずガクリと身体が傾いだ。

全員がハツとする中、長順が慌てて門の外に向かって叫んだ。

「音楽を止めろ！」

致庸と曹氏が慌てて致広を助け起こして座らせると、致広は目を閉じて大きく喘いだ。致庸
は心配して尋ねた。

「兄さん、大丈夫ですか？ もしご気分がすぐれないのなら、わたしは今日に行くのをやめます」

致広はこれを聞いて、カッと両目を開くと、びしやりと言った。

「黙れ！」

致庸は慌ててはいと頭を下げた。致広はひとしきり喘いでいたが、やがて氣力を振り絞つて
顔に笑みを浮かべた。

「致庸、おまえは行かねばならんのだ。兄はおまえに一言言っておきたいことがある」

致庸は大事にはいたらぬと見て、ほっとして笑った。

「兄さん、たかが郷試じゃありませんか。わたしのこの腹の中につまんでいる臭くてたまらぬ
八股文さえあれば、挙人の地位を騙し取るなんて別に大層なことでもあるまいし。兄さんは別
に……」

致広はびしやりと遮った。

「おまえは——」